

# 平安京右京八条三坊七町跡

## 発掘調査現地説明会資料

所在地 京都市下京区七条御所ノ内西町68-1他

調査期間 1988年5月17日～8月後半(予定)

調査面積 約960㎡

調査主体 財団法人京都市埋蔵文化財研究所

### 1、はじめに

今回の調査は、病院新築にさきだつ事前調査として実施したものです。調査地は、右京八条三坊七町のほぼ中央付近に位置し、北に塩小路、南に八条坊門小路、東に宇多小路、西に馬代小路に面している。今調査地の西端で馬代小路が想定され、これに関する遺構が予想された。

周辺の調査例として、1980年に西大路小学校会議室増築に先だつ調査と、1982年同小学校給食室新築に先だつ調査がある。前者では、平安時代の矩形を呈した木組暗渠施設が、後者では、平安時代前期の掘立柱建物・柵・井戸・東西溝、平安時代後期の東西溝・土壇などが発見され、今調査地が両調査地の北に接していることからこれらに関連する遺構の存在が予想された。現在まで次のような成果が得られた。

### 2、遺構の概要

今回の調査では、平安京以前の土壇・流路・溝、平安時代の溝・木組暗渠・礎石建物・土壇、室町時代の土壇・小溝・落ち込みなどがある。

#### a、平安京以前

調査地西方で、いずれも検出された遺構です。溝は、幅90cm、深さ15cmを測る浅いもので、その方位は国土座標から大きく振れている。溝中からは、わずかに古墳時代後期から奈良時代の遺物が出土する。土壇は、北隅で一部検出しただけであるが、径4m以上の不定形のものである。埋土中から奈良時代の土器が比較的多く出土する。

#### b、平安時代前期

馬代小路東側溝(SD31)、柱穴などがある。SD31は、調査区西端で一部分認められた南北溝で、西肩はSD28に切られる。幅80cm以上、深さは50cmほどで、遺物はごくわずか



出土するにすぎない。柱穴は、調査区中央付近で東西方向に二間分検出したにすぎない。

#### c、平安時代後期

今調査で最も顕著な遺構群である。南北溝SD28は、調査区の西端で検出した遺構で、幅3.5m、深さ50cm以上を測る。この溝で注目されるのは、北方が素掘りでかつ溝の中央で幅1mほど更に一段深くなっているのに対し、南方では南北11m以上に渡って溝底に人頭大から拳大の河原石を二・三段積んで敷きつめていることである。この石敷北端から南に7.5mの位置で東肩に寄った所に一辺1.2mの木製木枠組の施設が認められた。

木枠組は、今の所北・南・西の三方だけ横板を確認しただけで、南北が一段であるのに対し、西側だけは二段認められる。井戸枠のように支柱はなく、板の残りがわるいが、板は内傾し、隅で横板相互に組み合わせたものと考えられる。板はいずれも石敷のうえに置かれているが、南北では、その上に更に細かい河原石を積んで板を据えている。西側の木枠の西には、南北二列に人頭大の河原石を5～6個並べ、西側だけは、やや趣を異にする。

木組暗渠は、調査区の中央付近で矩形を呈し、幅1.5m、深さ90cmの逆台形の掘形の底で認められた。南北方向には、幅70cmで、長さ4.5m以上、東西方向では、幅90cm、長さ8mに亘って検出した。木組は、天井板二枚と両側板で構成され、底は河原石と砂利敷となっている。いずれも深さは25cm前後である。底には、ほとんど勾配が認められない。東西方向の東端では、両側板の端に杭を打ち込んだ痕跡が各々1ヶ所認められ、その間は、扁平な河原石を二列に階段状に二段分だけが認められた。

礎石建物は、この木組暗渠のすぐ北側で東西に六間分認められた。柱間間隔は西の四間が2.4mを測るのに対し、東の二間は2.1mと狭い。礎石は、扁平な河原石を用いているが、西の三石が30×25cmを測り、東の二石は35cm前後とやや大きい。また西の二間分は、出1.5mの庇が取り付くらしい。

木組と礎石建物の東方約2.4mには、北東から南西に向けて幅2.5mの緩やかに曲がる流れがあり、木組部分から南は、小さな河原石が肩部に敷きつめている。

#### d、室町時代

室町時代の遺構としては、調査地東方にて主に認められ、不定形な土壇や、南北小溝などが認められるにすぎない。

### 3、遺物

今回の調査で出土した遺物は、整理箱で20箱で、古墳時代から室町時代までのものが

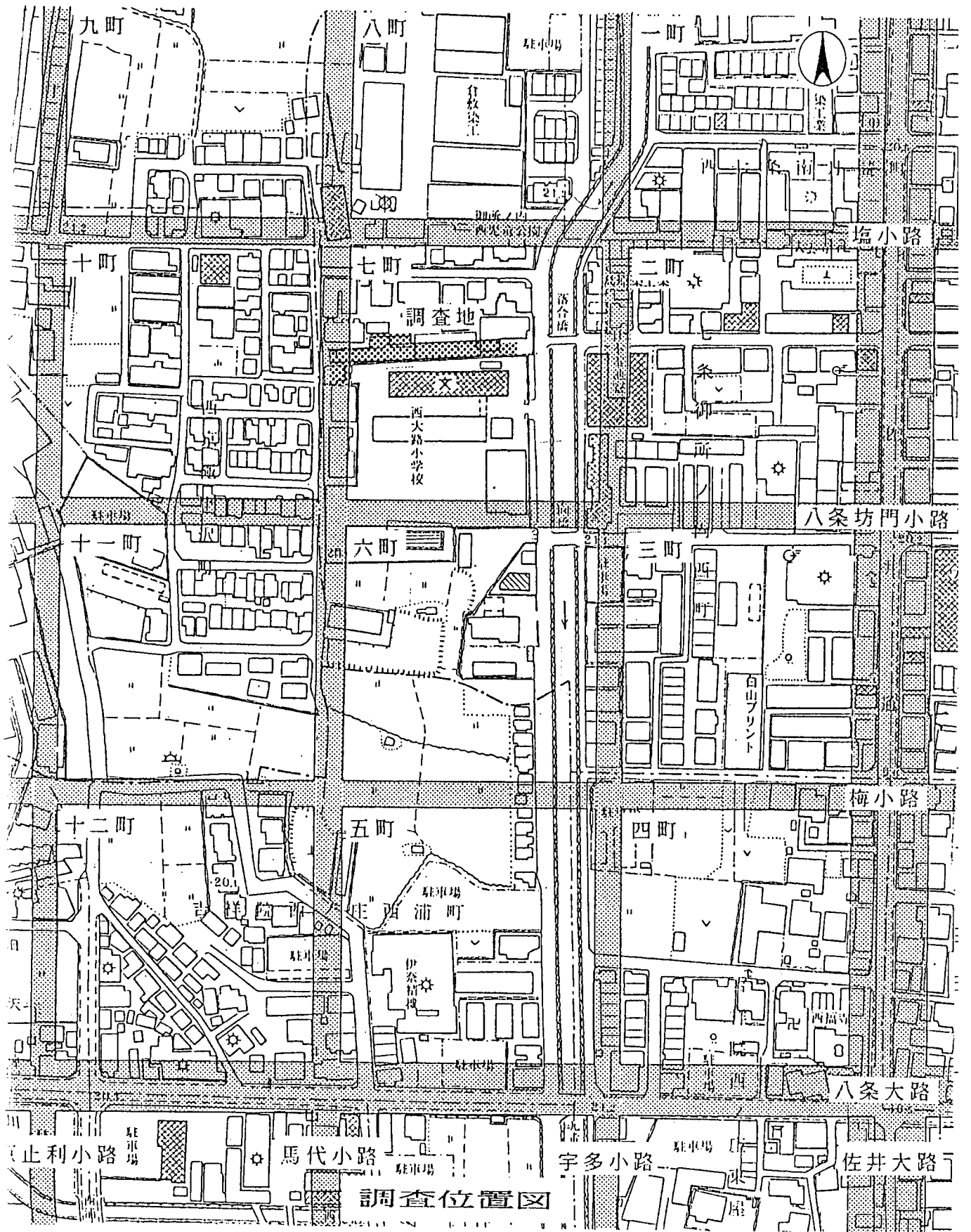
含まれる。いずれも細片が多い。

- 古墳時代 古式土師器（甕、高杯）  
須恵器（杯身、同蓋、甕）
- 奈良時代 土師器（杯、皿、甕）  
須恵器（杯身、同蓋、平瓶、甕）
- 平安時代 土師器（杯、皿、高杯、甕）  
須恵器（杯、壺、甕）  
緑釉陶器（椀、皿）  
灰釉陶器（椀、皿）  
黒色土器（杯）  
瓦器（椀）  
平瓦、丸瓦  
銭貨（宋銭）
- 室町時代 土師器皿  
焼きしめ陶器  
輸入陶磁器（青磁椀、瓶）

#### 4、まとめ

今回の調査の結果、平安時代後期に廃棄されたと考えられる顕著な遺構群を検出した。調査区西端の馬代小路の側溝を拡幅して設置した石敷施設と木枠は水利施設と考えられるが、調査区中央で検出した木組暗渠とは、敷地の制約上直接むすびつける調査はできなかった。もし、この両者が連結すると仮定するならば、石敷面と木組暗渠の底のレベルがほぼ同一であることから、一方から一方へ流れる勾配を想定した施設とは考えられない。しかし、接続しているならば、石敷施設に溜った水は、木組暗渠の東端まで至った可能性があり、石敷施設で水位を調整するならば、東端の水位を保つような仕組みが考えられる。そして、東端で水を組み上げ、流すことになれば、東方の流れと何らかの関係があるだろう。

いずれにしても礎石建物とその南の水利施設としての木組暗渠と流れが一体となって発見された調査は、平安京でも前例がなく、極めて特異な施設であり、古代の水利事業を考える上でも、非常に貴重な発見といえよう。





Y - 2 4 6 0 0

Y - 2 4 5 0 0

九町

八町

堀小路

十町

七町

調査地

馬代小路

1980年度

調査区

1982年度

調査区

宇多小路

X - 1 1  
7 0

八条坊門小路

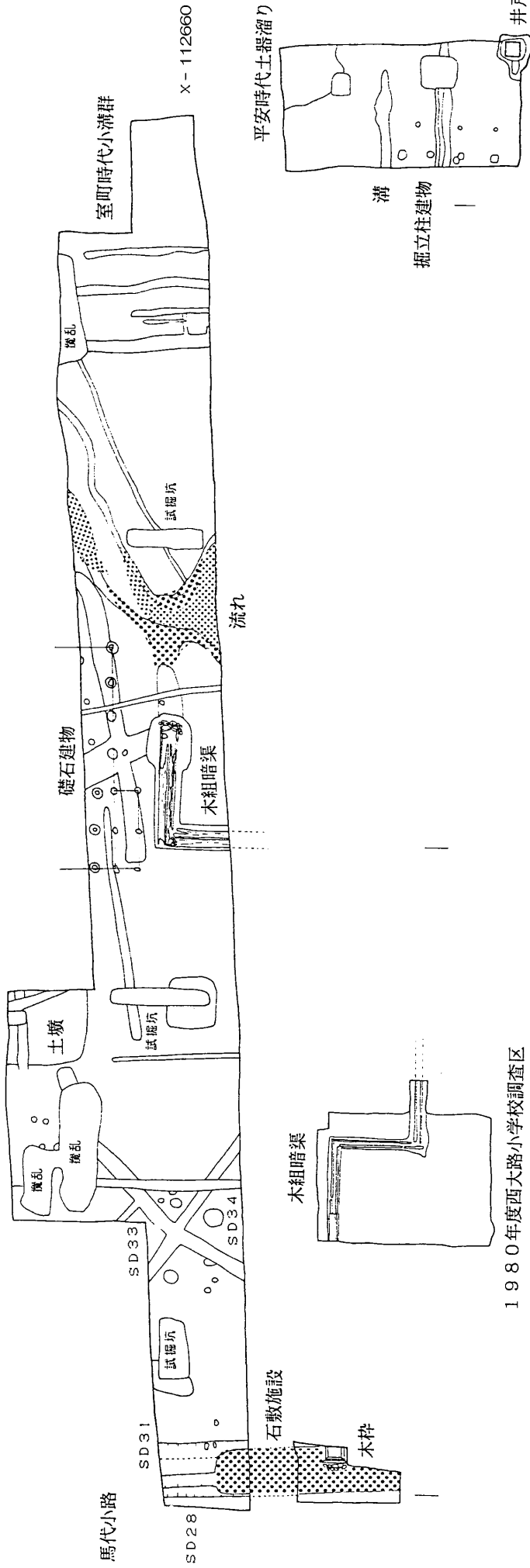
調査区配置図

平安京右京八条三坊七町

Y-24640

Y-24600

Y-24560



1980年度西大路小学校調査区

1982年度西大路小学校調査区

遺構配置図 (1:300)